

# 受け持ち事例 Cさん

## ■ 概要

Cさん 90歳代

認知症

生活の様子

日中離床後は車椅子上で生活している。視覚・聴覚・コミュニケーション能力に問題はなく周囲の利用者や職員と会話が可能。日中はテレビを見て過ごしている。認知症と診断されているが、症状はほとんど見られず日を跨いで継続した会話が可能

## ■ アセスメント

会話が好きだが、脳梗塞の後遺症により滑舌が悪くなった。口腔内トラブルは無い。ご家族とのオンライン面会が定期的であり、それを日々の楽しみとされている。

見当識障害は無いが居室とフロアのカレンダーが見つらく、「日付がわからなくて困っている」と仰っていた。

## ■ 介護ニーズ

話しにくさを軽減させて、障害訓練を行い、話しにくさを気にせず会話を楽しむ。  
自分の思いを伝えられるようにしたい

日付がわかるものが欲しい  
カレンダーと一緒に作成し、日付をわかるようにするだけでなく視覚的に楽しむ。

## ■ 介護目標

リハビリ感の無い構音

# 介護計画の実践過程

1

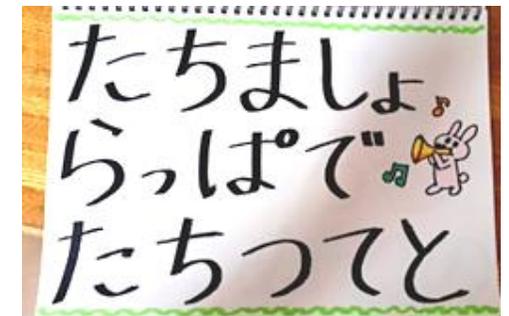
リハビリ感の無い構音障害訓練を行い  
話しにくさを気にせずに会話を楽しむ

## 介護計画

- ①北原白秋の「五十音」と早口言葉を使った文字カードを用意
- ②「Aさん専用の口の体操を考えてきたので良かったら一緒に行いませんか」と参加の意思と体調を確認する(実習生)
- ③ 水分補給を促しながら一緒に文字カードを見て読み上げる(一緒に)
- ④文字カードのイラストを見ながら会話をする(一緒に)
- ⑤利用者の言いにくそうな箇所を覚える(実習生)
- ⑥読み終わったら頬を揉みほぐす(本人)
- ⑦舌を左右に動かす体操を6回行う(本人)
- ⑧深呼吸と水分補給をして終了

## Aさんの様子

「話しづらいのが治るならぜひやりましょう」  
笑顔が多くみられ、終始意欲的に行われた。  
挿絵に興味を持ち喜ばれた。  
「ああ、この間の。ぜひやりましょう」  
前回やったことを覚えていた  
「楽しかったですよ、一緒にやってくれて。  
毎日ね、おおきに」



# 介護計画の実践過程

## 2

カレンダーと一緒に作成し、日付をわかるようにするだけでなく視覚的に楽しむ。

### 介護計画

- ①日めくりカレンダーの土台と見本を事前に作っておく。  
(実習生)
- ②季節モチーフ、大きくわかりやすい形のシールを用意する。(実習生)
- ③「カレンダーの飾りつけを少し手伝ってもらえませんか?」と現物を見せながら提案する(実習生)
- ④デザインや装飾を相談しながら行う(一緒に)
- ⑤シールを選び、貼る(本人)
- ⑥月のページはその月にある行事や旬のものについて話しながら行う(一緒に)
- ⑦塗り絵ページは色を選んでもらい(本人)代わりに塗る(実習生)
- ⑧本人が関わっているページには端に穴をあけ、印をつける。
- ⑨途中休憩や水分補給を促す(実習生)

### Aさんの様子

「簡単やわ、出来そうです」  
「どこに貼ろうかね、数字が来るからここがいいですかね」と少し不安げな様子はあるが、自分で貼る場所を決めた。  
塗り絵というワードを聞くと眩暈を連想して表情が暗くなった。  
色を選ぶだけだとわかると安心した表情になった。  
「派手な色がいいですよ」  
「葉っぱの色は一つ一つ変えましょう」  
「来年も再来年も使えるんですか？凄いですね、おおきに。長生きしないといけないですね」と喜んでいただいた



# 考察

1

● 効果よりも楽しんでいただくことを優先した計画を立てていたが、初日から積極的に参加していただいた。

→ 予定よりも読み上げる回数を増やしたり早口言葉の難易度を上げたりすることができ、効果を期待できる口腔体操を行うことが出来た。

● 挿絵や装飾からAさんの意欲を引き出すことが出来たのではないか。

● 「話す」ということはAさんの中で特に重要なこと

→ 体操による効果を期待して意欲的に参加していただけたのではないかと思った。

2

● 作業することよりも視覚的に楽しんでいただくことを目標にしていたが、作業を積極的に行っていた

→ ストレスフリーに飾りつけが楽しめるシールを増やすことで充実した時間を提供することが出来た。

● 作業環境について時計が見えず廊下の行き止まりのような場所だった

→ 他の職員の姿も見えずに不安にさせてしまった。実習生のことを信頼して作業を楽しんでもらうためにも普段と変わらない場所で行うことの重要性を感じた。

# 学んだこと

- 日々のコミュニケーションから信頼関係を築く
- 正しい知識と技術の取得、応用
- 環境を整える
- 日常生活や会話から利用者の潜在ニーズを引き出す
- 利用者にとって重要なことに気づく、尊重する